



「能力も性別も国境も関係ない、ダンスは世界共通語」

校長 猪瀬 政幸

10月23日に実施される「全校合同体育授業」に向けて、ダンスの練習が進んでいます。

9月23日には、再び講師を招いて学年ごとに1時間練習をしました。今回の講師には継続して全体指導をお願いしている吉江先生（昨年度本校体育科非常勤講師、四中卒業生）に加えて、特別講師として吉江先生と同級生でもある姜潤華（かん ゆな）さんをお呼びしました。

姜さんは、本校卒業後に、ダンス部として実績のある狛江高校に進学し、ダンス部の部長を務めました。大学進学後もダンスの団体に所属し、現在も教育関係の会社に勤めながら、イベント活動を中心にダンスを続けています。

姜さんのお話によると、「ダンスは上手いとか下手とか関係なくリズムに合わせて身体を動かせばそれでいい」とのことです。もともと、ストリート系のダンスはアメリカのギャング同士の抗争が起源だそうで、銃を撃つ代わりに、どちらがカッコよく踊れるかを競うことから始まりました。ダンスを通じて、傷つけあうのではなく、逆に、競い合ったのち互いの良さを認め合うことにつながりました。そこから様々なジャンルに発展していったそうです。



姜さん自身、自分の国籍のことや友人関係のことなど、悩み多き中・高校生でしたが、ダンスを通じて様々な悩みが吹き飛んでいきました。そして今、「ダンスは能力も性別も国境も関係なく、踊ることで心を通じ合うことができる世界共通語です。」と明るく笑顔で語ってくれました。

さて、生徒たちの練習の様子を見ていると人によって様々です。笑顔いっぱい思い切り動いている生徒もいれば、恥ずかしそうに手足をわずかに動かしている生徒もいます。ダンスの動きに慣れていない人は、だんだん振付が難しくなっていくにつれ当然うまく踊れません。だからなおさら動きが小さくなります。

「できないこと、失敗することは恥ずかしいこと、すなわち“ダメ”なこと」

私自身を振り返ると、小さい時から親や教師から、そんな教育を受けてきたように思います。国別の意識調査で、日本人は能力的に優れている分野がたくさんあるにもかかわらず、外国の人々に比べて自分に自信がないと感じている人の割合が多いのは、これまで行われてきた戦後教育の表れだと指摘する有識者も多くいます。

「失敗を繰り返すたびに、その経験を得て少しずつ成長していく。それを続けていけば、やがて大きな成功（成果）につながる。失敗を恐れて何も行動しなければ、成長する可能性は限りなくゼロに近い。」

スポーツ（運動）は楽しいこと。そして、楽しみながら体を動かせば、身体も心も健康になる。しかも適度な運動は脳機能も向上させる。それは年齢や性別、能力の差に関係なく誰にも好影響を与えます。



（左）吉江先生 （右）姜さん

もちろん、苦しい練習を積み重ねて結果が得られたときの喜び（達成感）は他では得難いものがありますし、それもまた、向上心を高めていくためには重要な要素です。

ダンスは身体だけでなく、固い頭をほぐすのに大変有効な手段でもあります。生徒たちが、このダンスの授業を通じて、失敗を恐れず、楽しく人生を生きていくことにつながれば良いなと思っています。